

クラシック音楽における芸術の空洞化（下） ——国際ピアノコンクール出場者の国籍の歴史的変遷を通じて——

青野 智子
猪飼 周平

Ⅳ. クラシックピアノ演奏家の空洞化現象は起きているのか

かつて中村が主張したピアノ演奏家の「蛮族」化について、第2節では、①ピアノ生産のアジア化、②クラシックピアノの中核地ドイツにおける国立大学の器楽・管弦楽科学生が留学生に置き換わりつつあること、また、③代表的な国際ピアノコンクールでのドイツ人入賞者の減少から、ドイツ人の演奏家の輩出が衰退していることを確認した。また第3節では、ショパン国際ピアノコンクールを始めとする4つの国際ピアノコンクールについて、いずれも、1980年代以降アジア諸国からの本選出場者が急増し、2000年代以降は他の地域の出場者を圧倒してゆくという構図が見出された。これは、本稿冒頭で整理した「蛮族」化を示す1)、2)の命題を支持する現象が実際に起きていることを示している。

ただし、冒頭でも述べたように、このようなピアノ演奏家のアジア諸国へのシフトが、芸術の盛衰に対してどのような意義を有しているかを評価することは簡単ではない。クラシック音楽を消費する文化が強固に残ったまま、ピアノ演奏家の輩出だけがアジアにシフトしている可能性があるからである。これは中村のいう「蛮族」化に最も近い状況であるように思われるが、この場合は、芸術としてのクラシック音楽自体が、その発祥地＝中核地から空洞化してきているとはいえないだろう。空洞化が実際に起きつつあるかどうかを確認するためには、クラシック音楽の発祥地＝中核地におけるクラシック音楽の消費動向を確認する必要がある。

以下では、第2節と同様、クラシック音楽の発祥地＝中核地の一つとしてドイツを取り上げて検討する。まずドイツ国内の録音音楽の購買者の動向を確認しよう。

ドイツでも2018年以降、音楽の購買はストリーミングのサブスクリプションサービスを介するものが急速に普及してきている。これは音楽の購買行動に大きな影響を与えていると考えられる。そこで、以下では主に2017年までのデータに依拠して、ドイツのクラシック音楽の購買層の動向を確認する。

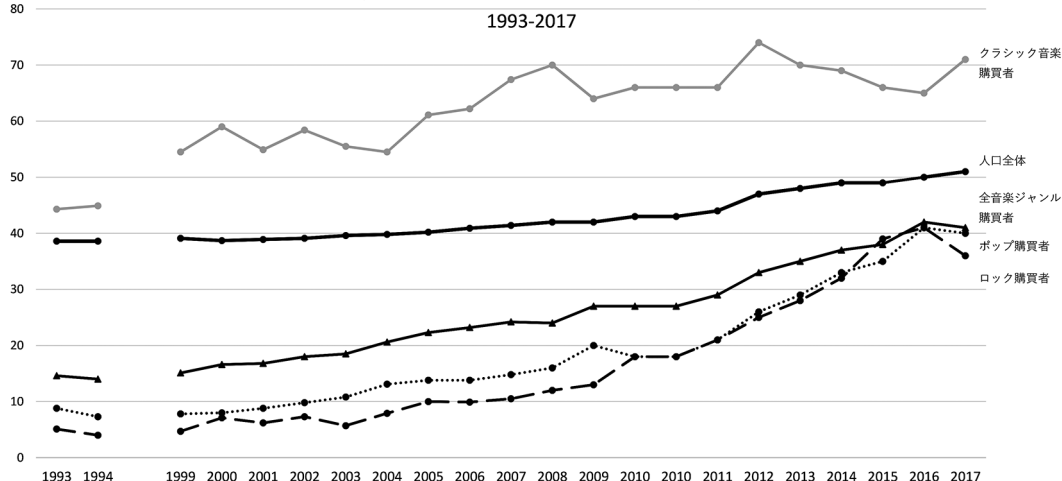
ドイツ国内の音楽レーベルや音楽関連会社が加盟する業界団体である連邦音楽産業協会の集計によると、1990年代以降のドイツの録音音楽（レコード、カセットテープ、CDなど）の購買者のうち、クラシック音楽の購買層は人口の高齢化の速度を超えて、年々高齢化していることがわかる（図1）。興味深いことに、ロックやポップは、クラシックよりも急速にリスナーが高齢化してきている。これらのジャンルはいわゆる流行り廃りがあることが当然と考えられているジャンルである。クラシック音楽はロックやポップよりは緩慢に廃れつつあるということかもしれない。

また、図2⁽¹⁾が示すように、録音音楽全体に占めるクラシック音楽のシェアも年々減少している。1999～2018年の期間にシェアは8.7%からわずか2.6%になった。これらのグラフが示すよ

うに、録音音楽の購買行動からみると、ドイツのクラシック音楽愛好家は単に高齢化しているだけでなく、その数もかなり減らしてきている可能性があるといえよう。少なくとも、録音音楽を聴く場合、ジャンルとしてのクラシック音楽の重要性は下がってきていると言える。

図 1

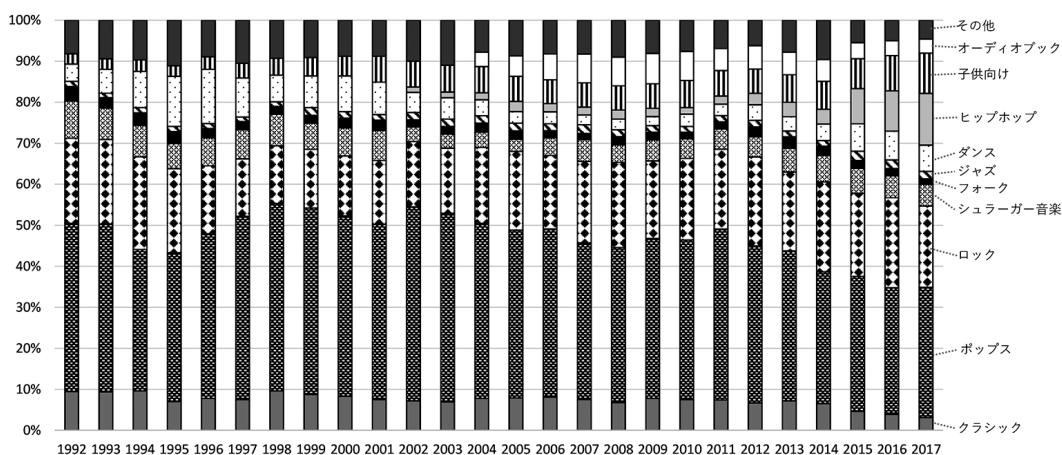
ドイツにおける
録音音楽購買者に占める50歳以上の割合
(ジャンル別と国内人口全体との比較)



出典: 以下より著者作成。Bundesverband der Phonographischen Wirtschaft. (1995) *Phonographische Wirtschaft Jahrbuch '95*;
Bundesverband der Phonographischen Wirtschaft. (2002)(2003)(2005) *Jahreswirtschaftsbericht 2001, 2002, 2004*;
Bundesverband Musikindustrie. (2008~2021) *Musikindustrie in Zahlen 2007, 2008,, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 2021*.

図 2

ドイツにおける録音音楽の国内売り上げ
ジャンル別シェア
1992-2017



出典: 以下より著者作成。Bundesverband der Phonographischen Wirtschaft (1995) *Phonographische Wirtschaft Jahrbuch '95*;
Bundesverband der Phonographischen Wirtschaft. (2002)(2003)(2005) *Jahreswirtschaftsbericht 2001, 2002, 2004*;
Bundesverband Musikindustrie. (2012)(2023) *Musikindustrie in Zahlen 2011, 2022*.

次に、クラシック音楽のコンサートに出かける頻度を確認しよう。ドイツの文化研究センターがドイツオーケストラ協会と共同で行なった2011年の調査（図3）によると、そもそもコンサートの観客は時代による増減がある。1980年代は観客が増加傾向にありその後緩やかに減少している。この間クラシック音楽の観客についてみると、コンサートへの参加者が全体として減少傾向にある1990年代以降も減っていないように見える。しかし、同時期のクラシックコンサートとオペラ観客の年代別のデータを分析した Keuchel と Mertens によると、この間のクラシックコンサートの観客が維持されていたのは、65歳以上の高齢者がより積極的に出かけるようになったため、その下の年齢層では概ね減少傾向にある（図4）。これらを総合すると、クラシック音楽のコンサートに出かける頻度はここ20年であり減少してきていないが、その背景には、若者のクラシックコンサート離れを補う形で、高齢者がクラシック音楽のコンサートに出かける頻度を上げていることがあることがわかる。

同じ動向は、より長期的な傾向としても確認できる。Reuband によると、ドイツ（旧西ドイツ）におけるクラシックコンサートとオペラコンサートの参加の仕方には、1972年と2016年との間で大きな違いがあるという。すなわち、1972年においては高齢者よりも若者の方が、クラシック、オペラともにコンサートへの参加率は高かったが、2016年にはこの傾向が逆転し、クラシック、オペラともに高齢者の方が参加率が高くなっている（表1）⁽²⁾。

1996年から2016年の世論調査会社の調査においても、ドイツ国内でクラシック音楽を聴くことを「とても好き」「好き」と回答した人の割合を見ると（図5）、より高齢になるほど高い割合となっており、若年層でのクラシック音楽に対する態度はより冷めたものとなってきたといえる⁽³⁾。

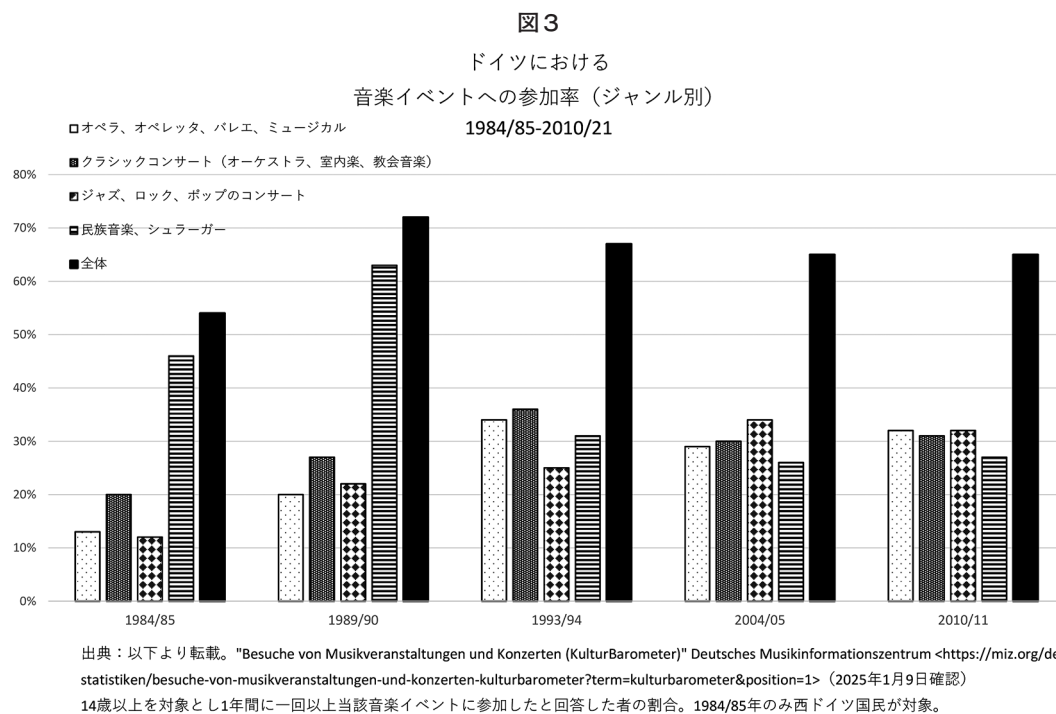
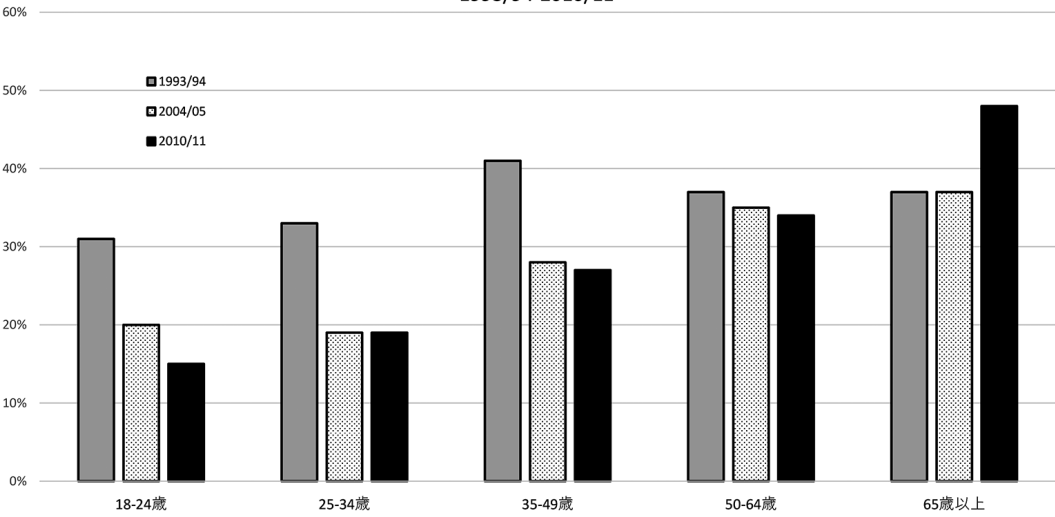


図 4

ドイツにおける
クラシック音楽演奏会への参加率
(年齢層別)
1993/94-2010/11



出典：Keuchel and Mertens (2011) p.3 (Noltze 2013)より転載。

表 1

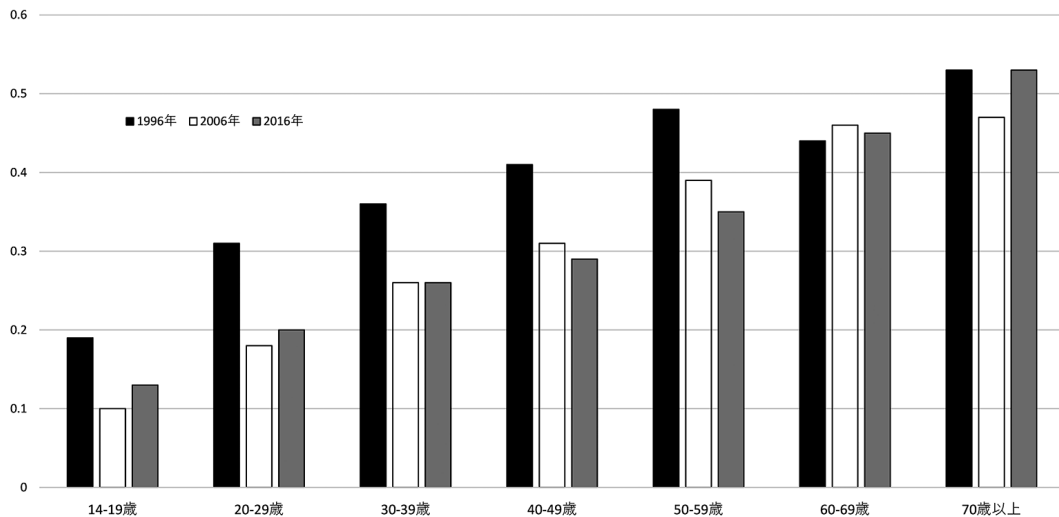
(旧) 西ドイツにおける
オペラとクラシックコンサートへの参加率
1972年と2016年

	オペラ		クラシックコンサート	
	1972年	2016年	1972年	2016年
14-21歳 *	7%	4%	13%	7%
22-39歳	13%	5%	9%	11%
40-59歳	11%	10%	10%	18%
60-69歳	10%	17%	10%	25%
70歳以上	6%	15%	7%	24%

*ただし2016年は16-21歳

出典：Reuband(2018) p.35より転載。

図5
クラシック音楽を聴くのが「とても好き」「好き」
ドイツにおける回答率
1996-2016



出典：Reuband (2021)より著者作成。

このようないわゆる観客の「白髪化」によるクラシック音楽の危機という認識は、ドイツ国内でも広く共有されているといえよう⁽⁴⁾。2005年に発表されたある予測では、何も対策を講じないならば、2032年までに生のクラシック音楽への需要は36%減少するとされ⁽⁵⁾ドイツ国内で議論となった。このような危機意識は1990年代以降、多くのオーケストラやコンサートホールにおいて、観客層の拡大や養成を目指す教育プログラムの導入を促進することにも貢献している⁽⁶⁾。ただ、上記の諸統計は、これらの取り組みがドイツのクラシック音楽の高齢化に対して強力な歯止めとはなっていないことを示唆している。

また近年のクラシック演奏会観客の予測を行った Neuhoff らの研究でも同様の結果が得られている。すなわち、今後しばらくは人口の多い戦後ベビーブーマー世代（1955～1971年生まれ）が観客層のコアとなるために、たとえ参加率が減少しても観客数は著しく減少しないが、2020-2025年ごろをピークとしてベビーブーマーが観客としてほぼ引退する2020年代末以降は、ドイツ国内のクラシック音楽観客数は急激に減少に転じるだろうとされている⁽⁷⁾。この分析が正しければ、図14にみるように、1993/94年をピークに減少の一途を辿ってきたようにみえるクラシック音楽観客が、2000年代初頭以降は減少が食い止められたかのようにみえるものの、今後の減少は避けられないということになるだろう。

これらを総合すると、ここ20年のクラシック音楽のコンサートへの参加は、全体としては目立って減少はしていないが、それは人口の多い高齢者層がよりクラシック音楽のコンサートに出かけるようになったことで需要が下支えられているために、見かけ上ドイツにおけるクラシック音楽の衰退が食い止められているようにみえるためである。Trondle が「コンサートであれ、オペラ、室内楽であれ、美学的・社会的制度としてのクラシック音楽が、社会との接点を失ってしまっていることは、今や共通の知識である」⁽⁸⁾と述べたように、クラシック音楽は、クラシック音楽

表2

EU諸国における「クラシック音楽を聴く」の回答率（％）

2001年

	15-24歳	25-39歳	40-54歳	55-69歳	70歳以上	合計
旧西ドイツ	6	21	26	42	36	27
旧東ドイツ	14	18	37	37	48	30
オーストリア	15	26	32	38	34	28
オランダ	12	27	39	66	80	39
ベルギー	9	23	31	43	44	29
ルクセンブルク	16	39	60	58	83	47
デンマーク	22	34	47	59	62	45
スウェーデン	25	34	50	56	62	44
フィンランド	17	27	30	39	35	29
英国	9	26	42	57	64	36
北アイルランド	5	13	31	37	33	21
アイルランド	8	17	26	25	24	19
フランス	11	21	40	46	52	30
イタリア	9	18	28	39	50	26
スペイン	8	23	27	34	34	23
ポルトガル	16	30	23	17	12	21
ギリシャ	16	19	16	12	18	16

出典：Reuband (2003) p.160より転載。

「どのような音楽を聴くか」の問いに、各種音楽ジャンルから選択する形での回答。

を生み出し、その中核であり続けてきたドイツおよびドイツ語圏においても、たしかに衰退への道を進んでいるということができよう。

なお、ドイツ以外の欧州諸国については、本稿において十分な検討を与える余裕はないが、EUの2001年の調査によると、EU諸国におけるクラシック音楽視聴（ラジオ・TV・CD・PC等で）の割合は多様であるものの、いずれの国においても年齢層が下がるにしたがって、クラシック音楽の視聴は減少している（表2）⁽⁹⁾。

ドイツはクラシック音楽が一種の土着音楽の一つとして人びとの日常生活に根付いており、「さすが本場は違う」と日本人演奏家たちから羨望の眼差しで見られてきた。⁽¹⁰⁾ 実際、「全世界の主要オーケストラの約4分の1が、ドイツ国内に存在している」「オペラ公演の三分の1がドイツ国内で行われている」といった、「音楽の国ドイツ」を語るエピソードには事欠かない⁽¹¹⁾。東西統一後に減ったものの、現在ドイツには129のオーケストラが存在しており、これは日本の25と比べると圧倒的に多く、上記のように日本人演奏家たちが嘆息するのも無理はない⁽¹²⁾。だが、そのドイツにおいても演奏家レベルでも観客レベルでも、確かにクラシック音楽は衰退しつつあるのである。

V. 結語

ここまでの検討で明らかになったことは次のことである。1) ドイツ国内において、クラシックピアノ演奏家の養成は衰退している、2) 少なくともトップランクのピアノ演奏家の輩出はアジアにシフトしてきている、3) ドイツ国内で相対的に若い層からクラシック音楽離れが起きており、これはすでに録音音楽の購買行動として表面化しており、コンサートの観客も高齢化が進んでいるため、近い将来大きく減少することが予測できる状況にあることである。

中村絃子は、その鋭い洞察によって1)、2) が進行していることを看取していた。だが、現実に関わりつつあることは中村の観察を越えるものであるといわなければならない。中村のいう「蛮族」化はサッカーのプレミアリーグやテニスのウィンブルドンのように、芸術の「本場」の人がとが、アジア人演奏家に依存する形で、クラシック音楽を享受することを意味していた。だが、現実にはその「本場」であるドイツにおいて、文化を支えるうえでもっとも土台となる観客のレベルでクラシック音楽が衰退してきていたのである。

筆者が検討してきたのは、クラシックピアノの領域のみであるが、すこし事態を敷衍するならば次のようなことが起きている可能性を想像することができるだろう。すなわち、19世紀にドイツなど西欧諸国において、権威を確立した芸術は、その評価基準を世界中に伝播させていったが、肝心の中核地においてすでにその権威は衰退し、ドーナツのような中空構造になりつつあるのではないかと。そして、いうまでもなく中核を失ってしまえば、芸術という文化現象が、普遍的なものではなく、歴史的な事象の一つであるということがより顕になるのではないかと。

ただ、本稿が示唆するように、今日の芸術が中空構造になりつつあるとする場合、周縁部については何が起きていると理解すべきなのだろうか。この点は本稿で検討できる範囲を越えるものであり、確たることを言うには今後の研究の進展を俟つ必要があるが、この論点での研究の進展のために、最後にこの点についてコメントしておくことにも一定の意義があるだろう。本論でも述べたように、すでに日本でも「芸術」という用語を忌避する傾向がみられるようになってきている一方で、井手口（2022）のように、社会生活基本調査の分析から、日本の若年層がクラシックコンサートに出かける頻度が減っていないと結論付ける研究も現れている。その意味では、日本における芸術の衰退傾向の是非は引き続き検討されるべき課題であろう。

加えて、そもそも、日本において芸術は一度でも根付いたことがあるのか、という根本的な問いも有効であろう。舞台芸術に関する限り、日本では、専用劇場は相対的に少なく、プロフェッショナルなオーケストラ、オペラ劇団、バレエ団も少ない。いわゆる「蛮族」化の背景には日本のクラシック音楽のマーケットの小ささも関係している。他方で、アマチュアやセミプロによる「コンサート」は非常に多く開催されている。井手口はコンサートに出かける頻度は減っていないと結論しているが、出かける先には上記のような発表会的な「コンサート」も多く含まれていると考えられる⁽¹⁵⁾。とするなら、一つの仮説として次のようなものを考えることができよう。すなわち、日本においては、ピアノを演奏する裾野は大きいためにエリート演奏家も多く輩出されている。その一方で、日本国内のクラシック音楽を日常的に楽しむ文化的素地は希薄であるためにマーケット自体は小さい、と。

これらの論点が明らかになるとき、芸術における中空構造が、芸術および文化政策にどのような意義を有しているのかも明らかになるといえる。

本稿執筆にあたっては、以下の方々に資料収集の面において特別の取り計らいを頂いた。特に記して感謝申し上げます。In accessing the pertinent data, we wish to thank Jerzy Michniewicz, Chief Specialist of Piano Competitions, Artistic Department, the Fryderyk Chopin Institute, and Valeria Ciccarello, New media and Archives, Queen Elisabeth Competition for their generous assistance.

注

- (1) ジャンル別の録音音楽売り上げ実額のデータがあることが望ましいが、連邦音楽産業協会の公表しているデータがシェアのみであるため、ここではシェアのみの提示にとどまっているということを断っておく。
- (2) Reuband 2018.
- (3) Mende und Neuwöhner 2006; Hamann 2011等においても同様の傾向がみられる。また、図5においては明瞭に示されているわけではないが、一般的に、音楽の好みは年齢ではなく年代コーホートの影響が強いとされており（Reuband 2005; 2009; 2020; Hamann 2005; 2011）、現在の若年層が加齢とともにクラシック音楽への好みを増大させることは考えられにくいとされている。（Gembris and Menze 2018, 311-318; Hamann, 2008; 2011; Reuband 2018; 2019）。
- (4) 同様の危機感は、特に2010年代以降、地方財政の悪化のなかで各都市の文化予算が問題となるなかで、ドイツ国内のみならずドイツ語圏においてもひろく共有されている。「洗練された芸術形式を市場の影響から守るためには、州政府は公立劇場への支援をおこなうべきであるという考えは長らく自明視されてきたが、もはやそれのみでは、正当性の神話としては十分ではないようだ。」（Mandel 2022, 17）。他にも Noltze 2013; Heinen 2013, 9-10, 13, 22-23; Neumann und Burghardt 2021; Scherz-Schade 2022等を参照。
- (5) Hamann 2005, 17.
- (6) Toelle 2024, 198.
- (7) Neuhoff 2008, 22-23 ; Neuhoff und Pecschen 2012, 12.
- (8) Trondle 2011, 9.
- (9) 2021年にオランダのマーストリヒト大学で行われたシンポジウム「クラシック音楽の未来を創生する」での成果を紹介する Thomas and Peters 2024は、以下のような危機感を表明している「クラシック音楽に未来はあるだろうか？（略）これらのビジョンに共通しているのは、その未来には重大な挑戦が伴うことを前提としている点である。未来はクラシック音楽に訪れようとしており、しっかりと準備しなくてはならない」（Thomas and Peters 2024, 1）。
- (10) もちろんこのような「音楽の国ドイツ」というナショナルイメージは、当初イタリアやフランス等と比べて文化的に「後進国」とされたドイツが、市民社会と国民国家の成立の過程を経るなかで19世紀に確立されたものである。教養や崇拜の対象としての「芸術」であるクラシック音楽を、コンサートホールにおける演奏会を通じて普及するドイツのクラシック音楽の制度は、19世紀以降に確立した（宮本2006; 吉田2013）。これは、ヨーロッパにおける芸術概念の成立過程とも関連しており、松本によるとドイツの「音楽の国」としてのイメージは楽器としての近代ピアノの誕生とも深く結びついているという（松本2012）。また「音楽の国ドイツ」のイメージがどのように日本に定着したのか等も重要な論点ではあるが、そのようにして歴史的に成立した芸術概念の衰退を検証するのが本稿の目的であるため、本稿では扱わない。
- (11) Mertens 2018, 5-6; Noltze 2013, 66/1749.

- (12) Deutsches Musikinformationszentrum 2022; 日本オーケストラ連盟 2021, 150-151.
 (13) 日本における「発表会」を中心としたアマチュアによる文化活動については、宮入編著2015等を参照。

引用・参考文献

- 青野智子. 2021. 「アメリカにおける文化創造政策の挫折 全米芸術基金 (NEA) 助成プログラムの歴史過程 : 1966-1996」『文化経済学』18巻1号 : 17-35.
- 青柳いづみこ. 2022. 『ショパン・コンクール見聞録 革命を起こした若きピアニストたち』集英社新書.
- Asmat, Roberto, Karol J. Borowiecki, and Marc T. Law. 2023. "Do experts and laypersons differ? Some evidence from international classical music competitions." *Journal of Economic Behavior & Organization* 214: 270-290.
- Babalova, Mariya. 2009. "Valeriy Gergiyev obeshchal opirat'sya na moral'nyy kodeks." *Izvestiya*, October 27.
- Bouckaert, Thierry. 2001. *Le reve d'Elisabeth: cinquante ans de Concours Reine Elisabeth*. Éditions Complexe (= Peter King and Sara Montgomery trans. 2001. *Elisabeth's Dream*. Éditions Complexe).
- Bourdieu, Pieere. 1979. *La distinction: critique sociale du jugement*. Minuit (= 石井洋二郎訳1990. 『ディスタンクシオン I』『ディスタンクシオン II』藤原書店).
- , 1992. *Les Règles de l'art*. Éditions du Seuil (= 石井洋二郎訳1995-1996. 『芸術の規則 I』『芸術の規則 II』藤原書店).
- 文化庁. 1986. 『芸術活動振興のための新たな方途』文化庁.
- , 2004. 『文化芸術立国の実現を目指して 文化庁40年史』ぎょうせい.
- Cunningham, Stuart D. 2009. "Trojan Horse of Rorschach Blot? Creative industries discourse around the world." *International Journal of Cultural Policy* 15 (4): 375-386.
- Delhasse, Pierre. 1985. *Musique et Passion le concours reine Elisabeth des origins a aujourd'hui*. Le Cri/Vander.
- Deutsches Musikinformationszentrum. 2022a. "Planstellen der öffentlich finanzierten Orchester." January <<https://miz.org/de/statistiken/version/2022-planstellen-der-oeffentlich-finanzierten-orchester>> (2025年1月9日確認)
- , 2022b. "Studierende in Studiengängen für Musikberufe - nach Hochschularten." November <<https://miz.org/de/statistiken/version/2021-studierende-in-studiengaengen-fuer-musikberufe-nach-hochschularten>> (2025年1月9日確認)
- Dybowski, Stanislaw. 2010. *The Laureates of the Chopin Competitions in Warsaw*. Selene.
- Ehrlich, Cyril. 1976. *The Piano, a History*. Oxford University Press.
- Flôres, Renato G., Jr, and V. A. Ginsburgh. 1996. "The Queen Elisabeth Musical Competition: How Fair is the Final Ranking?" *Journal of the Royal Statistical Society, Series D (The Statistician)* 45 (1): 97-104.
- Gembris, Heiner and Jonas Menze. 2018. "Zwischen Publikumsschwund und Publikumsentwicklung. Perspektiven für Musikerberuf, Musikpädagogik und Kulturpolitik." In *Das Konzert II Beistrage zum Forschungsfeld der Concert Studies*, edited by Martin Tröndle. transcript (= Erik Dorset. trans. 2022. "Between Audience Decline and Audience Development Perspectives on the Professional Musician, Music Education, and Cultural Policy." In *Classical Concert Studies: A Companion to Contemporary Research and Performance*, edited by Martin Tröndle. Routledge).
- Ginsburgh, Victor and Marie-Paule Orban. 2002. "Le concours Reine Élisabeth Que sont les lauréats devenus?" *Revue belge de Musicologie / Belgisch Tijdschrift voor Muziekwetenschap* 56: 279-298.

- Ginsburgh, Victor A and Jan C. van Ours. 2003. "Expert opinion and compensation: Evidence from a musical competition." *The American Economic Review*, 93(1) 289-296.
- Glejser, Herbert and Bruno Heyndels. 2001. "Efficiency and Inefficiency in the Ranking in Competitions: the Case of the Queen Elisabeth Music Contest." *Journal of Cultural Economics* 25(2): 109-129.
- Gray, Clive. 2007. "Commodification and Instrumentality in Cultural Policy." *International Journal of Cultural Policy* 13(2): 203-215.
- Grout, Donald J. and Claude. V. Palisca. 1996. *A History of Western Music*. W. W. Norton (= 戸口幸策, 津上英輔, 寺西基之訳1998.『西洋音楽史』上・中・下 音楽之友社) .
- Grum-Grzhimailo, Tamara N. 1998. *Konkurs Chaikovskogo: Istoriia, lista, sobytiia*. Grant.
- Hamann, Thomas. 2005. "Die Zukunft der Klassik." *Das Orchester* 53 (9) : 10-19.
- , 2008. "Musikkultur - Einfluss der Bevölkerungsentwicklung auf Publikum und Konzertwesen." In *Musik im Alter. Soziokulturelle Rahmenbedingungen und individuelle Möglichkeiten*, edited by Heiner Gembris, 195-211, Peter Lang.
- , 2011. "Besuch von Konzerten klassischer Musik - eine Frage des Alters oder der Generation?" In *Musikpsychologie - Musikelektion zur Identitätsstiftung und Emotionsmodulation (Jahrbuch der Deutschen Gesellschaft für Musikpsychologie)*, edited by Wolfgang Auhagen, Claudia Bullerjahn, and Holger Höge. Hogrefe.
- 半谷史郎. 2015. 「チャイコフスキー・コンクールの政治力学：対外文化政策の一事例として」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』16: 217-240.
- Heinen, Andreas. 2013. *Wer will das noch hören? Besucher Strukturen bei niedersächsischen Sinfonieorchestern*. Springer VS.
- Heinich, Nathalie. 1993. *Du peintre à l'artiste : artisans et académiciens à l'âge classique*. Éditions de Minuit, coll. « Paradoxe » (= 佐野泰雄訳2010.『芸術家の誕生』岩波書店) .
- Horowitz, Joseph. 1990. *The Ivory Trade: music and the business of music at the Van Cliburn International Piano Competition*. Summit Books (= 奥田慶二訳1995.『国際ピアノ・コンクール』早稲田出版) .
- 井手口彰典. 2022. 「年齢層から見た国内のクラシックコンサート・ゴアーの変化 『社会生活基本調査』からの知見を中心に」『応用社会学研究』64: 11-28.
- 加治屋健司. 2016. 「地域に展開する日本のアートプロジェクト 歴史的背景とグローバルな文脈」藤田直哉編『地域アート』堀之内出版.
- 金子一也. 2004. 『チャイコフスキー・コンクール 神話の終焉』早稲田出版.
- Keuchel, Susanne and Gerald Mertens. 2011. "Präsentation des 9. KulturBarometers." Deutsche Orchestervereinigung (DOV) und Zentrum für Kulturforschung (ZfKf) <<https://miz.org/de/dokumente/ergebnisse-aus-dem-9-kulturbarometer>> (2025年1月9日確認)
- Klyuchnikova, E., P. Raigorodsky, and A. Ustinov. 2014. *Mezhdunarodnyy konkurs imeni P. I. Chaykovskogo: Khronika sobytiy. Fakty. Interv'yu. Kommentarii: 1994, 1998, 2002, 2007, 2011*. Kompozitor.
- 小林真理. 2004. 『文化権の確立に向けて』勁草書房.
- , 2018. 「はじめに」『文化政策の現在3 文化政策の展望』小林真里編. 東京大学出版会.
- , 2021. 「文化経営学の対象 文化政策研究の発見」『文化資源学』東京大学文化資源学研究室編. 東京大学出版会.

- McCormick, Lisa. 2015. *Performing Civility: International Competitions in Classical Music*. Cambridge University Press.
- Majewski, Paweł ed. 2020. *Chopinowskie igrzysko. Historia Międzynarodowego Konkursu Pianistycznego im. Fryderyka Chopina 1927-2015*. Wydawnictwa Uniwersytetu Warszawskiego (= Tomasz Zymer trans. 2021. *The Chopin Games: History of the International Fryderyk Chopin Piano Competition in 1927-2015*. University of Warsaw Press) .
- Mandel, Birgit. 2022. "Wandel ist nötig: Transformationen klassischer Kultureinrichtungen durch veränderte Nachfrage." *Das Orchester* 70 (3) : 16-19.
- 松本彰. 2012. 「『音楽の国ドイツ』の成立と崩壊」『ドイツ研究』46 : 6-18.
- Mende, Annette and Ulrich Neuwöhner. 2006. "Wer hört heute klassische Musik?" *Media Perspektiven* 5: 246-258.
- Mertens, Gerald. 2018. *Orchester-management, 2.Auflage*. Springer VS.
- 宮入恭平編著 2015.『発表会文化論』青弓社.
- 宮入恭平・増野亜子・神保雨夏子・小塩さとみ編 2024.『コンクール文化論』青弓社.
- 宮本直美. 2006.『教養の歴史社会学 ドイツ市民社会と音楽』岩波書店.
- 中村絃子. 1988.『チャイコフスキー・コンクール ピアニストが聴く現代』中央公論社, 中公文庫 1991.
- , 2003.『コンクールでお会いしましょう 名演に飽きた時代の原点』中央公論社, 中公文庫 2006.
- , 2017.『ピアニストだって冒険する』新潮社.
- 中岡司. 2021.『文化行政50年の軌跡と文化政策』悠光堂.
- 長島達也. 2022.「世界的に活躍する音楽家20人が選んだ世界最高峰の国際コンクール6選！」<<https://www.youtube.com/watch?v=2hWVz46Y4Fw>> (2025年1月9日確認)
- Nesemann, Maria und Charlotte Burghardt. 2021. "Welche Krise (n) ? Eine Diskursanalyse zum Krisenbegriff in der Theater-Fachöffentlichkeit und der kulturpolitischen Fachöffentlichkeit." In *Das (un) verzichtbare Theater*, by Birgit Mandel, Charlotte Burghardt, Nesemann, Maria. Universitätsverlag Hildesheim.
- Neuhoff, Hans. 2008. "Konzertpublika - Sozialstruktur, Mentalitäten, Geschmacksprofile." Deutsches Musikinformationszentrum <<https://d-nb.info/1063914450/34>> (2025年1月9日確認)
- Neuhoff, Hans und Jan P. Peschlow. 2011. "Die Konzertpublika in Deutschland. Eine Szenariodiskussion bis 2050." *Musikforum* 4: 8-13.
- Niewiarowska, Barbara. 2000. *Kronika Międzynarodowych Konkursów Pianistycznych im. Fryderyka Chopina 1927-1995*. Tow. Im. Fryderyka Chopina.
- 日本オーケストラ連盟. 2021.『日本のプロフェッショナル・オーケストラ年鑑2022』公益財団法人日本オーケストラ連盟.
- Lifanovskiy, Boris. 2008. "Ne strelyayte v pianista... Otryvochnyye zapiski v bloknote reportera." *Moskovskiy Muzykal'nyy Vestnik* 2008/7/1 <<https://web.archive.org/web/20240115021425/https://www.mmv.ru/tchaikovsky/information/newspaper/mmv1.htm>> (2025年1月9日確認)
- 西原稔. 2013.『ピアノの誕生・増補版』青弓社.
- Noltze, Holger. 2013. *Musikland Deutschland? Eine Verteidigung. Musik in der Gesellschaft*. Bertelsmann Stiftung.
- 大野佐紀子. 2008.『アーティスト症候群』明治書院.
- 大内孝夫. 2022.『音大崩壊』ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス.
- Philippon, Charles. 1985. *Douze Lauréats pour un Concerto: La Vie du Concours Reine Elisabeth*. Editions G carré.

- ResearchInChina. 2013. *Global and China Piano Industry Report 2012-2013*. ResearchInChina. < <http://www.researchinchina.com/UpLoads/ArticleFreePartPath/20130527142428.pdf>> (2025年1月9日確認)
- Reuband, Karl-Heinz. 2003. "Musikalische Geschmacksbildung und Generationszugehörigkeit. Klassik-Präferenzen im europäischen Vergleich." In *Deutsches Jahrbuch für Kulturmanagement 2002. Band 6*, edited by Armin Klein. Nomos Verlagsgesellschaft.
- , 2005. "Sterben die Opernbesucher aus? Eine Untersuchung zur sozialen Zusammensetzung des Opernpublikums im Zeitvergleich." In: *Deutsches Jahrbuch für Kulturmanagement 2003/2004*, edited by Armin Klein, Thomas Knubben. Nomos.
- , 2009. "Die Institution Oper in der Krise? Generationsbedingte Änderungen des Opernbesuchs und des Musikgeschmacks im Langzeitvergleich." *KM -Kultur und Management im Dialog* 38: 8-12.
- , 2018. "Die Neustrukturierung der Altersbeziehung kultureller Partizipation Ein Langzeitvergleich bundesweiter Bevölkerungsumfragen." *Zeitschrift für Kulturmanagement: Kunst, Politik, Wirtschaft und Gesellschaft* 4(1): 23-54.
- , 2019. "Die soziale Neustrukturierung des Opernpublikums: Der Opernbesuch der städtischen Bevölkerung in den 1970er Jahren und der Gegenwart im Spiegel kommunaler Umfragen." *Die Musikforschung* 72(3): 214-242.
- , 2020. "Die Krise des Opern- und Klassikpublikums: Imaginierte Wirklichkeiten oder Soziale Realität?" *Neue Zeitschrift für Musik* 181(1): 12-14.
- , 2021. "Musikpräferenzen und Musikpublika." <<https://miz.org/de/beitraege/musikpraeferenzen-und-musikpublika?term=kulturbarometer&position=14>> (2025年1月9日確認)
- 佐藤泰一. 2005. 『ドキュメント ショパン・コンクール』 春秋社.
- Sazonova, E. and M. Serebrovskii. 1978. *Moskva-Konkurs imeni Chaikovskogo: 1958-1978 pyati konkurskov: istoriya, razmishleniya*. Moscow.
- Scherz-Schade, Sven. 2022. "Zukunftsfragen im Rückblick: Ist die demografische Struktur des alternden Klassikpublikums eine Sorge von gestern?" *Das Orchester* 70 (3): 6-8.
- Shiner, Larry. 2001. *The Invention of Art: A Cultural History*. University of Chicago Press.
- 園田孝宏. 1999. 「1999年度『エリザベート王妃・コンクール』を審査して」 <https://web.archive.org/web/20050223194849fw_/http://www.music.co.jp/~evica/con/queen.html> (2025年1月9日確認)
- , 2005a. 「2003エリーザベト王妃国際コンクールその1」 <https://web.archive.org/web/20050224031238fw_/http://www.music.co.jp/~evica/con/queen_piano1.html> (2025年1月9日確認)
- , 2005b. 「2003エリーザベト王妃国際コンクール その2」 <https://web.archive.org/web/20050224031238fw_/http://www.music.co.jp/~evica/con/queen_piano2.html> (2025年1月9日確認)
- Statistisches Bundesamt. 2019. "Sonderauswertung: Hochschulstatistik: Bildungsausländer/-innen an Musikhochschulen nach Staatsangehörigkeiten WS 2017/2018." Statistisches Bundesamt.
- Stockhem, Michel. 2012. "75 years of Shared Music." <<https://concoursreineelisabeth.be/Concours3/documents/75ansdemusiquepartageeEN47560.pdf>> (2025年1月9日確認)
- 田中智晃. 2021. 『ピアノの日本史 楽器産業と消費者の形成』 名古屋大学出版会.
- Thomas, Neil and Peter Peters. 2024. "Classical Music Futures: An Introduction." In *Classical Music Futures: Practices of Innovation*, edited by Neil Thomas Smith, Peter Peters and Karoly Molina. Open Book

Publishers.

Toelle, Jutta. 2024. "Is it Time for Brahms, Again? The Many Roles of Classical Music in the German-Speaking Lands in 2023." In *Classical Music Futures: Practices of Innovation*, edited by Neil Thomas Smith, Peter Peters and Karoly Molina. Open Book Publishers.

Waldorff, Jerzy. 1985. *Wielka gra: Rzecz o Konkursach Chopinowskich*. Iskry (= 足達和子訳 1988. 『ものがたりショパン・コンクール』音楽之友社, 増補版) .

吉田寛. 2013. 『＜音楽の国ドイツ＞の系譜学1～3』青弓社.

Yoshihara, Mari. 2007. *Musicians from a Different Shore: Asians and Asian Americans in Classical Music*. Temple University Press (= 吉原真里. 2013. 『「アジア人」はいかにしてクラシック音楽家になったのか? 人種・ジェンダー・文化資本』アルテスパブリッシング) .

吉原真里. 2010. 『ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール 市民が育む芸術イベント』アルテスパブリッシング.

青野 智子 (元ニューヨーク市立大学大学院研究員)

猪飼 周平 (一橋大学大学院社会学研究科教授)